



とは

65歳以上の人口は現在約3,300万人で、総人口の25.9%を占め、4人にひとりが65歳である。そして、20年後の予測値は33.4%と、実に3人にひとりとなり超々高齢化社会がすぐそこに来ている。

老々介護の末に起こる配偶者による殺人事件、あるいは高齢者施設における施設スタッフによる入居高齢者殺人事件など、ひと昔前では想像もできないような悲しい事件が各地で起こっており、取り上げれば枚挙にいとまがないほどだ。

昨年、白馬八方から「100活宣言」を発信した。

もう間もなく3人にひとりが65歳以上で占められる社会においては、若年層に面倒をみてもらうという発想をかなぐり捨て、「100歳まで生き生き」「我々こそ中心世代」「我こそ人生の達人」「我々こそ人生の極め人」が「100活」の基本マインドだ。

我が国は世界的にみても最長寿国になった。実に素晴らしいことである。一方、要介護者になっても生きながらえてしまう。そこには人としての尊厳は微塵もない。そして前述のように、長年連れ添った配偶者に命を絶たれる、あるいは高齢者施設で施設スタッフに殺されてしまう、そんな時代に突入した。健康志向が高まって、中高年者がこぞって“長生きするために”ジョギングをしたりサプリメントを飲んでいたが、これからは“長生きしちゃうかもしれないから健康でいなければ”に変わっていくだろう。「老いることは死ぬことより怖い」時代になってしまった。超々高齢化社会に立たされたいま「人としての尊厳」「老いへの挑戦」も「100活」の大きなテーマである。

「100活」を理解する上で、ひとつ分かりやすい例を挙げよう。

9月15日は「敬老の日」だ。そう、お年寄りを敬うことを、皆が改めて自分に言い聞かせる日なのだろう。しかし、4人ひとりが、いずれ3人にひとりが高齢者となってしまった現在はどうであろう。前述のように、身の回りで起こっている様々な事象を見る限り、「敬われる」ではなく「疎まれる」存在になっているのでは。

であれば、「我々こそ中心世代」「我々がこの世を支えよう」、さらにもっと進めて限りなく少なくなる「若年層の面倒をみてやろう」と、「敬老の日」を「100活の日」に、「シルバーウィーク」を「100活ウィーク」にして、「100活」マインドの意思表示としよう。

白馬八方では昨年の「100活宣言」以降、「100活ご招待」として60歳以上の皆様を日本唯一の天然水素溶存の白馬八方温泉にご招待させていただいたり、「100活募集」として、お年を召してもまだまだ元気な「100活者」の方々と一緒にお仕事したりと、様々な取組みを行っている。そしてこの冬シーズンは、昨年パノラマゲレンデで試験的に実施して、スキー・スノーボードを通して「100活」を標榜する「100活者」の方々に大好評をいただいた100活ゲレンデを今シーズンは常時オープンする。また、「100歳まで生き生き・100活スキー講座(仮)」や、1・2月には「100活アーリーモーニング(仮)」なども予定している。

この冬シーズンは、白馬八方尾根スキー場の「100活ゲレンデ」において、「100歳まで生き生き」を標榜する「100活」にエントリーされてはいかがだろう。